握手（1）

井上 ひさし

　上野公園に古くからある西洋料理店へ、ルロイ修道士は時間どおりにやって来た。桜の花はもうとうに散って、葉桜にはまだ間があって、そのうえ動物園はお休みで、店の中は気の毒になるぐらいすいている。椅子から立って手を振って居所を知らせると、ルロイ修道士は、

「呼び出したりしてすみませんね。」

と達者な日本語で声をかけながら、こっちへ寄ってきた。ルロイ修道士が日本の土を踏んだのは第二次大戦直前の昭和十五年の春、それからずっと日本暮らしだから、彼の日本語には年季が入っている。

「今度故郷へ帰ることになりました。カナダの本部修道院で畑いじりでもしてのんびり暮らしましょう。さよならを言うために、こうして皆さんに会って回っているんですよ。しばらくでした。」

　ルロイ修道士は大きな手を差し出してきた。①その手を見て思わず顔をしかめたのは、光ケ丘天使園の子供たちの間でささやかれていた「天使の十戒」を頭に浮かべたせいである。中学三年の秋から高校を卒業するまでの三年半、わたしはルロイ修道士が園長を務める児童養護施設の厄介になっていたが、そこには幾つかの②「べからず集」があった。（中略）その中に、「ルロイ先生とうっかり握手をすべからず（二、三日鉛筆が握れなくなっても知らないよ）。」というのがあったのを思い出して、それで少しばかり身構えたのだ。この「天使の十戒」が、さらにわたしの記憶の底から、③天使園に収容されたときの光景を引っ張り出した。

　風呂敷包みを抱えて園長室に入っていったわたしを、ルロイ修道士は机越しに握手で迎えて、

「ただいまから、ここがあなたの家です。もう、なんの心配もいりませんよ。」

と言ってくれたが、彼の握力は万力よりも強く、しかも腕を勢いよく上下させるものだから、こっちの肘が机の上に立ててあった聖人伝にぶつかって、腕がしびれた。

　だが、顔をしかめる必要はなかった。それは実に穏やかな握手だった。ルロイ修道士は病人の手でも握るようにそっと握手をした。それから、この※ケベック郊外の農場の五男坊は、東京で会った、かつての収容児童たちの近況を熱心に語り始めた。

※ケベック…カナダ南東部の都市。

回想

過去の出来事を振り返りながら語ることを**回想**という。物語や小説では、回想が入ることで現在と過去の出来事が交互に展開することがある。

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「その手を見て思わず顔をしかめた」とあるが、なぜ顔をしかめたのか。適当なものを選びなさい。

ア ルロイ修道士が天使園の園長であったことを思い出し、かしこまったから。

イ ルロイ修道士の握手が穏やかなものだったので、不思議に思ったから。

ウ ルロイ修道士と握手をすべからずといわれていたのを思い出したから。

(2) ――線②「べからず集」はどのようなものか。次から選びなさい。

ア しなければならないことを集めたもの。

イ したほうがよいことを集めたもの。

ウ してもよいことを集めたもの。

エ してはいけないことを集めたもの。

(3) ――線③「天使園に収容されたときの光景」とあるが、この光景がえがかれている箇所の最初と最後の三字を答えなさい。ただし句読点も字数に含む。

〜

(4) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 「わたし」がルロイ修道士と再会したのは、桜の花が散ってしまい、葉桜になっていた頃だった。

イ ルロイ修道士は「わたし」に、別れを告げるために皆に会って回っているのだと話した。

ウ 「わたし」はルロイ修道士が園長を務める光ヶ丘天使園に、中学を卒業するまで厄介になっていた。